平成三十年度

第六十四回青少年読書感想文コンクール

札幌市読書感想文コンクール部門

受賞作品集

小学校・中学校・高等学校

札幌市学校図書館協議会

後援

札幌市
札幌市議会
札幌市教育委員会
札幌市ＰＴＡ協議会
北海道高等学校ＰＴＡ連合会石狩支部
株式会社　北海教育評論社
株式会社　平和堂
教育出版株式会社
株式会社　図書館ネットワークサービス
株式会社　光陽社
光村図書出版株式会社　北海道支社
東京書籍株式会社
文研出版

目　次

札幌市長賞	学校が大好きだから	札幌市立北野台小学校	三年　大野　佑真	1
札幌市議会議長賞	「自分と向き合うこと」	藤女子中学校	三年　梶原　捺	2
札幌市教育長賞	人としての尊厳を本当に奪ったのは	札幌聖心女子学院高等学校	三年　瀧田　小麦	3
札幌市学校図書館協議会会長賞１	誰かの笑顔につなぐ髪	札幌市立清田緑小学校	五年　東地　心菜	4
札幌市学校図書館協議会会長賞２	心にイスを置いて―一〇五度の空間に夢を見つけ	札幌市立簾舞中学校	二年　伊田　紗雪	5
札幌市学校図書館協議会会長賞３	『夜と霧』を読んで私が生きる意味を問う	札幌聖心女子学院高等学校	三年　須藤　あまね	6
札幌市ＰＴＡ協議会会長賞１	たいせつな１００円	札幌市立清田緑小学校	二年　東地　賢頼	7
札幌市ＰＴＡ協議会会長賞２	私の見つけたペッポとジジ	藤女子中学校	一年　原　杏奈	8
札幌市ＰＴＡ協議会会長賞３	『夜と霧』を読んで	札幌聖心女子学院高等学校	三年　竹内　萌乃	9
北海道高等学校ＰＴＡ連合会石狩支部長賞	村田エフェンディ滞土録を読んで考えたこと	札幌聖心女子学院高等学校	三年　大久保　絵未	10
光陽社賞	「命」ということ	藤女子中学校	二年　市川　瑞穂	11
キハラ賞	はやくはしれるようになりたい	札幌市立北野台小学校	一年　中川　華	12
教育出版賞	アルジャーノンに花束を	札幌市立宮の丘中学校	三年　大曲　美唯子	13
北海教育評論社賞	『一〇五度』と私	札幌市立向陵中学校	一年　須田　羽奈	14
図書館ネットワークサービス賞１	家族の笑顔	札幌市立美香保小学校	五年　木村　藍吏	15
図書館ネットワークサービス賞２	平和を願って～僕が語り継ぐべきこと	北海高等学校	二年　小西　海翔	16
光村図書出版賞	やり遂げることの大切さ	札幌市立宮の森小学校	六年　松田　莉奈	17

第６４回　札幌市読書感想文コンクール
入　賞　者　一　覧

平成３０年度

札幌市長賞	札幌市立北野台小学校	３年	大野　佑真	課題　学校が大好きだから
札幌市議会議長賞	藤女子中学校	３年	梶原　捺	指定　「自分と向き合うこと」
札幌市教育長賞	札幌聖心女子学院高等学校	３年	瀧田　小麦	自由　人としての尊厳を本当に奪ったのは
札幌市学校図書館協議会会長賞１	札幌市立清田緑小学校	５年	東地　心菜	自由　誰かの笑顔につなぐ髪
札幌市学校図書館協議会会長賞２	札幌市立簾舞中学校	２年	伊田　紗雪	課題　心にイスを置いて―一〇五度の空間に夢を見つけ
札幌市学校図書館協議会会長賞３	札幌聖心女子学院高等学校	３年	須藤　あまね	自由　『夜と霧』を読んで私が生きる意味を問う
札幌市ＰＴＡ協議会会長賞１	札幌市立清田緑小学校	２年	東地　賢頼	自由　たいせつな１００円
札幌市ＰＴＡ協議会会長賞２	藤女子中学校	１年	原　杏奈	自由　私の見つけたペッポとジジ
札幌市ＰＴＡ協議会会長賞３	札幌聖心女子学院高等学校	３年	竹内　萌乃	自由　『夜と霧』を読んで
北海道高等学校ＰＴＡ連合会石狩支部長賞	札幌聖心女子学院高等学校	３年	大久保　絵未	自由　村田エフェンディ滞土録を読んで考えたこと
光陽社賞	藤女子中学校	２年	市川　瑞穂	自由　「命」ということ
キハラ賞	札幌市立北野台小学校	１年	中川　華	自由　はやくはしれるようになりたい
教育出版賞	札幌市立宮の丘中学校	３年	大曲　美唯子	自由　アルジャーノンに花束を
北海教育評論社賞	札幌市立向陵中学校	１年	須田　羽奈	自由　『一〇五度』と私
図書館ネットワークサービス賞１	札幌市立美香保小学校	３年	木村　藍吏	指定　家族の笑顔
図書館ネットワークサービス賞２	北海高等学校	２年	小西　海翔	自由　平和を願って～僕が語り継ぐべきこと
	札幌市立宮の森小学校	６年	松田　莉奈	指定　やり遂げることの大切さ

学校賞

毎日新聞社賞	小学校	該当校なし
	中学校	札幌市立向陵中学校
	高等学校	札幌聖心女子学院高等学校

札幌市長賞

学校が大好きだから

札幌市立北野台小学校　三年　大野　佑真

「行ってきます。」
ぼくは、ドアを開ける。となりのおじさんは、スクールガードをしてくれている。
「おはようございます。」
と、あいさつをするのが日課だ。おじさんは、しょく物や虫にくわしいので、いろいろと教えてくれる。
と中で、友だちに会い、いっしょに歩いて学校へ行く。「今日はどんなじゅ業があるのかな。」と楽しみな気分で校門をくぐる。
世界には、大へんな思いをして学校に行く子どもがいる。さらに、まずしくてはたらかなければならない子や地しんやつ波で家がこわれて学校に行けない子どももいる。
ぼくは、この本で、心にのこった通学路が三つある。
一つ目は、フィリピン。川を歩いてわたっている。日本では、川を歩いてわたるのは、大人でもきけんがともなうことだ。
二つ目は、インドネシア。落ちかけて、かたむいているはしのロープをつたってうんていのようにわたっていく。校庭にあるうんていは楽しいが、このはしをわたる子どもたちは、命がけだ。
三つ目は、中国。中国は広い。場所によって通学路も様々だ。高いがけにはしごをかけて登っていく。荷物が多いと、かた手ではしごをつかまなければならないので、いつもい上に注意がひつ要だ。ロバに乗って学校に行くのは、少しうらやましいが、高地では空気も薄いから歩くのも大へんだろうな。細い山道を一れつになって歩いている。落ちないように。でもみんな笑顔だ。
ぼくは、英語を習っている。そこでも、「世界の通学路」について学ぶ本を読んだ。その中には、日本もあった。東京の子どもたちが道がこんざつするので地下鉄で通っているという場面があった。同じ日本でも、通学の仕方はちがうのだと思った。
ぼくは、「通学路がせいびされていればいいのにな。」と思った。しかし国によっては、はしをかけたり道を作ったりするお金がないのも事実だろう。
ぼくは、世界の子どもたちがこんなに大へんな思いをして学校に行っていることをはじめて知った。そんな思いまでして、学校に行く理由は何だろう。それは、みんなきっと同じだ。
学校が大好きだから。
友だちがたくさんいる。たまには、けんかもするけれど、休み時間にはなかよく遊んだり話したりする。少しかぜをひいたくらいなら、学校に行く。
安全に歩いて学校に行けるなんて、幸せなことだとあらためて思う。
帰り道、近所のおじさんやおばさんに会い
「さようなら。」
と、あいさつをする。もうすぐ家だ。
「ただいま。」
また、明日の学校が楽しみだ。

「すごいね！みんなの通学路」
ローズマリー・マカーニー　文　西田佳子　訳　西村書店

札幌市議会議長賞

自分と向き合うこと

藤女子中学校　三年　梶原　捺

「『なりたい』という気持ちには、うまくいかないと弱い気持ちが入り込んできます」

この一言が、私の心に突き刺さって離れなかった。まるで、私のためだけに書かれた言葉のように思えたからだ。

私には「ミュージカル女優になりたい」という夢がある。でも、その思いは「なりたい」というだけで、なかなか「なる」と強く主張することはできなかった。夢が叶わなかったら恥ずかしいという弱い気持ちが、そういうことを躊躇わせていたのだ。

筆者である栗山秀樹は、決して甲子園で注目を集めるような、野球の才能に恵まれている人ではなかった。背は低く、もともとスポーツの感性を備えているわけでもなかった彼にとって、プロ野球選手になることは不可能に近かったはずだ。しかし、そういったコンプレックスを乗り越えて、プロ野球チームに入り、今や監督となってチームを日本一へと導いている。私は、そんな彼の原動力とは何なのかということに、非常に興味を惹かれた。

読み進めていくうちに、じんわりと体に沁み込んできた言葉がある。それは、「可能性」という言葉だ。彼は言う。「可能性が〇．〇〇一パーセントでも残されているなら、それに向かって突き進まなければ必ず後悔します。」と。私は、「必ず」という言葉に疑心を抱いたが、そう信じて夢を叶えてきた彼が言うと、嘘だとは思えなかった。

今までの私はどうだろうか。心の片隅に「可能性」をくだらなく思う自分がいた気がする。私には「可能性」など何もないのだという思いも少なからずあった。夢を持ってこそいるが、人と比べ、自分の足りないところを探しては責めるということを繰り返していただけであった。知らぬ間に、自分を箱の中に閉じ込めていたのだ。これでは「可能性」が開けるはずもない。

私は、ダンスや歌はずっと習っているから下手ではない。しかし、あくまで全てがそこそこなのであって、これだけは人に負けないと言えるものが私には何一つ無い。それが、たまらなくもどかしい。「あなたは何でもできて良いよね」と言われることがあるが、私には、それがどうしても誉め言葉には聞こえないのだ。むしろ「何も取柄が無いのね」とわざわざ言われているように思えて胸が打ちひしがれる。

彼は野球に対する情熱は誰にも負けていなかった。きっと、その「情熱」こそが彼をここまで導いてきた原動力なのだ。私は、そう確信していった。勿論、彼は挫折したことが無いわけではない。プロ野球チームで他の選手との差を感じて、希望を見失いかけていたこともあった。しかし、そんなときに、監督がマンツーマンでの居残り練習をしてくれるようになったのだ。希望を見失いかけていたとしても、どこかに「情熱」が潜在していたに違いない。そして、そのことに監督が気付いたのだ。いや、もとから知っていたのだろう。だからこそ、諦めてほしくない。どうにかして彼を立ち上がらせたい。といった気持ちが込み上げてきたのだ。

彼の「情熱」は、監督をも動かすような大きなものだった。一方、私の思いは誰にも届かないような小さなものだ。とても、「情熱」と呼べるものではない。野球が好きで、我が身を削ってまで練習をする彼と、辛いことから目をそらすようにして生きている私との間に大きな差を感じた。そして、思った。少しずつこの差を埋めていかなくてはいけないと。そのためには、人一倍の努力が必要だ。今は無駄だと思ってしまうかもしれない。でも、努力や経験が、思わぬところで生かされることもあると私は思う。これからの人生がどう変わっていくかは、誰にも分からないのだ。

こうして自分と向き合い、私は気付いたことがある。それは、私が無意識の中で生きてきていたということだ。

これまでに、何度も「どうしてミュージカル女優になりたいの」と聞かれたことがある。私は大抵、「初めてミュージカルを観たときに感動したからです」と答える。そう答えることに慣れてしまったが、それでも、答えようとする度に、喉で何かが詰まる。その理由が今、分かった。私が「無意識」に夢を追いかけていたからである。私の思いが、この一文に収まるだけの小さなものであるはずがない。それなのに、その続きを私は答えることができない。幼い頃から見ていた夢なのに、惨めに思えるほど輪郭がぼやけているのだ。そう思うと、今まで一度も自分と向き合おうとしなかったことがただただ悔しい。

私は、いつかこの問いに答えられるようになりたい。いや、なるのだ。きっとこれは、自分探しという旅を道連れにするだろう。人と比べるのではなくて、過去の自分と比べてどう成長したのかを感じていきたい。

私は今、ようやくスタート地点に立ったのである。

「栗山魂」　栗山　英樹　著　　河出書房新社

札幌市教育長賞

人としての尊厳を本当に奪ったのは

札幌聖心女子学院高等学校　三年　瀧田　小麦

「同じってわけはないだろう。指が曲がってるんだから。」

ハンセン病を克服し、夢であった社会参加を始めた徳江の姿に、店の経営者である「奥さん」が放った言葉。何と残酷で惨いことをと思ったが、実はこの言葉こそが今も社会に深く根付いている。これは決して、無知な少数派の声ではない。今も多数を占めている、目を背けてはならない現実なのだ。

過去に罪を犯し、償いを終えて恩人である人の「奥さん」に、どら焼き店「どら春」の店長を任されている千太郎。ただ生きるためにどら焼きを焼き続けている。そこへ現れたのが、七十六歳の徳江だった。曲がった指を隠すことなく、左右の形が違う目で徳江は屈託なく「どら春」で働きたいという。初めて会った徳江の尋常ではない姿に、千太郎もまた戸惑いを覚え、客商売への影響を考えるが、裏方であん作りを任せるのならと徳江を雇う。

既成のあんを使っていた千太郎にとって、徳江のあん作りは衝撃的だった。小豆を一粒ずつ選り分け、数えきれないほどの手間暇を惜しみなくかける。その工程を、徳江は指の不自由さも年齢も感じさせることなくこなしていく。徳江の姿に千太郎は、深く引き込まれる。徳江の作ったあんが認められ、客は増えた。誰もが徳江の作ったあんで幸せを感じたはずなのに、徳江の指を曲げた元凶であるハンセン病の噂が広がり始めると客足は一気に遠のいた。店の存続が危うくなった頃、それを察した徳江は店を去る。やり切れない思いの中で、千太郎は徳江がハンセン病の元患者であり、今も療養所と呼ばれる世間から隔絶された場所で暮らしていることを知る。誰もが認めた徳江の作ったあんは、元ハンセン病患者が作ったものであると知られた途端、忌み嫌われる物となってしまったのだ。ハンセン病が治って何十年経った今も、病気の名残は新たな偏見・差別を生み出し、またも徳江からやっと手にしたささやかな幸せまでも、無慈悲に奪っていった。

私にも生まれついての障害がある。保育園の運動会で、そのハンディキャップを補おうと手をつなぎ一緒に走ってくれた先生の手の温もりを、私は今でも忘れない。両親もその姿に、私の成長を感じ喜んでくれた。しかし、その光景を見ていた他の親は違った。

「ああいう普通じゃない子がいると、みんなが迷惑する。自分の居場所がここじゃないことに気付かないのか。」

私の姿を指さし憤る人が、そこに確かにいたのだと私は後に知った。先生と共にグラウンドを駆け抜け、泣きながら笑って私を抱きしめてくれた母の涙は、私の成長への歓喜だけではなく、我が子を異質な存在と言い切った者への悔しく切ない涙でもあったのだ。

親も私も障害を選んだ訳ではない。不本意ながら一度貼られたレッテルは、私が生きている限り剝がすことは許されない。そのレッテルで私は今日まであらゆる場面で仕分けされ、希望を閉ざすこととなった。ハンセン病のレッテルを貼られた徳江も、あらゆる可能性を奪われた。名前も故郷も、人間の尊厳さえも。しかし、それらを奪ったのは、実はハンセン病だけではなかった。完治したにもかかわらず、見た目にこだわり、自分たちの住む場所から強硬に排除したのは、無知な隣人だった。自分の人生を狂わせたのが病だけではなく、偏見を持つ人々だったことを悟った時の徳江の落胆を、自分のあの体験に重ねると、私は痛いほどに共感ができた。理不尽な運命に翻弄されながらも、一度でいいから人として働くことで社会参加し、誰かのために役立ちたいと願った徳江。徳江との出会いは千太郎に、誰もが持っているはずの人としての矜持を思い出させた。たとえ世の中が間違っていても、指は曲がってしまっても、自分の信念だけは絶対に曲げたりはしないのだという徳江の気高さが、千太郎の行く先に光を灯した。

徳江が亡くなり、療養所を尋ねた千太郎は納骨堂へ向かう道で、入居者が亡くなると、その人が生きた証として木を植えるのだと教えられた。十人十色のたとえのように、そこに根を張った様々な木々は、饒舌だと思えるほどに枝葉を自由に伸ばしていた。入居者たちが誰に束縛されることなく生きられたのは、物言わぬ木になってからだった。

夢に向かっての努力を私は厭わない。しかし、差別や偏見と闘わなければ、徳江も私もそのスタートラインに立つことさえ許されない。徳江の「闇の底でもがき続けるような勝ち目のない闘いのなかで、私たちは人間であること、ただこの一点にしがみつき、誇りを持とうとしたのです。」の言葉に、私は奪われたはずの彼女の尊厳をみた。私も徳江のように世の闇を認めながらも、その闇に取り込まれることなく穏やかに歩み続けたいと思った。自分に関わってくれる大切な人たちに、私の生まれた意味を、俯くことなく伝えたい。

「あん」　ドリアン助川　著　ポプラ文庫

札幌市学校図書館協議会会長賞

誰かの笑顔につなぐ髪

札幌市立清田緑小学校　五年　東地　心菜

「髪、伸びたな。そろそろ切ろうかな。」

背中の真ん中ぐらいまで伸びた髪をとかしながらつぶやいた時、母が、

「だったら、ヘアドネーションしてみたら。」と言いました。それが、『髪がつなぐ物語』を読むことにしたきっかけです。

長く伸ばした髪を寄付する活動を『ヘアドネーション』といいます。寄付された髪は、「医療用ウィッグ」として、病気や、その治療によって髪の毛を失ってしまった子どもたちのために使われるということが分かりました。美容室で髪を切ったしゅん間に、それはゴミになってしまいます。けれど、それを寄付するだけで、生まれ変わり、役立ててもらえるのなら、私もやってみたいと思いました。

ヘアドネーションには３１センチ以上の長さが必要です。この時、私はまだ足りなかったので、そこから一年半伸ばし、ついに３１センチの寄付ができる長さになりました。

ウィッグを待っている人はたくさんいます。けれど、日本ではまだあまり知られていません。だから、髪の毛が足りなくて、一年近くも待つこともあります。一つのウィッグを作るのに、２０～３０人分の髪の毛が必要なのです。病気が治って退院しても、普通の生活に戻るために、ウィッグは必需品です。人毛の、しかも、その子の頭にぴったり合うウィッグはとても高価です。それまでにも高い治療費がかかっていることがわかっている人の中にはきっと欲しくても言い出せない人もいると思います。私は、ヘアドネーションの活動をもっとたくさんの人に知ってほしいです。

髪でなやんでいる子どもたちに一日でも早く、ウィッグを届けてあげたい。そう思わずにいられない出来事が書いてありました。小児ガンを患った十六才の奈緒ちゃんの話です。

化学療法の治療のため、頭にも眉にも毛が一本もなく、やつれていましたが、

「ウィッグができたら、友だちにも会いたいな。家族で旅行にも行きたいし……。やりたいことがいっぱいあるのよ。」

と、うれしそうに話していたのに、出来上がったことを伝える電話をした時、その日亡くなっていたのです。ずっと楽しみに待っていたんだろうな。あと一日でも早く出来上がっていたら喜んでくれただろうな。そう思うと私は涙が止まりませんでした。

私が髪を寄付して約一か月がたったころ、認定証が届きました。私の髪がどこかで誰かの笑顔につながってくれるかもしれないと思うと、とてもうれしい気持ちになりました。私たちが本当に目指さなければならない社会は、髪がないことに偏見をもたれないで、自然の姿で生きられる、そんな世の中なのかもしれません。そんなことを考えながら、私はバッサリ切った髪をまた次の誰かの笑顔につなげるために、伸ばし始めました。

「髪がつなぐ物語」　別司　芳子　著　文研出版

札幌市学校図書館協議会会長賞

心にイスを置いて―一〇五度の空間に夢を見つけよう―

札幌市立簾舞中学校　二年　伊田　紗雪

人が一人で立つときの角度は九〇度だ。一方、イスに軽く寄りかかって座る際にちょうどいい角度は、一〇五度だそうだ。それはイスだけではなく人間関係にも言える。お互い九〇度同士で密着しては窮屈だが、一〇五度同士で寄りかかり合うと隙間ができる。その程よい空間が、今の私には必要だったのだ。

物語の主人公の真と梨々が夢中になっているのは、イスだ。真は、イス職人だった祖父の影響で、イスをデザインすることに魅せられている。イスには歴史が感じられて、何代にも渡る人たちの気配があると言う。同級生の梨々はイス会社の娘で、イスの設計図面を形にする、モデラーになりたいと思っている。

大人は、「夢中になれることを見つけなさい。」とか、「何かに打ち込みなさい。」と言う。だが、それらの言葉を鵜呑みにしてはいけない。なぜなら、前提として必ず、「しっかり勉強をした上で」という枕詞がつくからだ。

私の母も、勉強については口うるさくて、

「もっと頑張ろう。勉強をすることによって将来の仕事の選択肢が広がるんだよ。」

と言い、志望校に合格した姉や兄のようになれと、私にも期待を寄せてくる。しかし私は最近、勉強でつまずくことが多いから辛い。

私と違い真は成績優秀だが、真の父親にとっては物足りないらしい。勉強以外に技術で勝負してきた自分の父親、つまり真の祖父のようなイス職人の世界は、真からは遠ざけたいもののようであるし、自分が会社で出世できないのは、一流大学を卒業していないからだと思っている。悔しさを晴らすように、勉強が苦手な弟の分まで、真に期待している。

「明るい未来をつぶすな。道を間違えなくて良かったと感謝するときが来るはずだ。」と真の父親は言い切るが、真にとっての明るい未来は違う。イスを描くときが、鎖で縛られている心を開放できる、唯一の時間なのだ。

険悪な父と子の間に、ひょうひょうと割って入るのが祖父である。真の祖父は息子の文句などをさらっと受け流すから、喧嘩にならない。祖父は、真とも父とも良い距離を保つように心掛けているのだ。一方で父親は真に密着し過ぎている。真の未来に自分を重ねて、自分の過去をやり直そうとしているようだ。

これは正に、私と母の関係性と同じである。常に密着し合っているから、息苦しくなる。真のように、親の言うことを取りあえず聞き入れて、もっと勉強をすればいいのだが、二年生になってから、益々勉強に身が入らない。

一体、いつからこの悪循環に陥ってしまったのだろう。三人きょうだいの末っ子の私は、幼い頃はいつも家族の誰かに抱っこされていた。両親や姉兄、祖母の柔らかい膝に座り、温かい腕に抱き締められていた。六人家族の甘えっ子という役割は、いつまでも続くと思っていた。だが、姉も兄も進学のために家を離れ、祖母は今では施設で寝たきりの状態だ。両親に対しては素直になれない。私が大好きだった、あの抱っこの角度は何度くらいだったのか。ヒントはこの物語の中にあった。

真と梨々はコンクール用のイスを作る中で、一〇五度という角度にたどり着いた。ソファーのように、ごろっと寄りかかるのも良くない。思い切り寄りかかると、相手が支え切れなくなる。少しだけ寄りかかるのが良い。寄りかかり合って、「人」という漢字にもなる。

私は、分度器や三角定規で作図してみた。人と人がお互いに一〇五度で寄りかかり合うには、二人の間に適度な間隔が必要だと分かった。九〇度と九〇度の二人が並ぶと、体が密着してしまう。それでは窮屈だ。まるで私と母の関係だ。九〇度同士で譲らないから、喧嘩になる。幼い頃は自由に甘えて抱っこされていた私が、いつの間にか九〇度で突っ立ち、意地を張る中学生になってしまっていた。

真が、父親には反発するが祖父の言うことはよく聞くように、私も、母とはストレートに言い合ってしまうが、姉や兄に言われると素直になれる。姉や兄となら、一拍置いて考え合うからだ。今まで意識していなかったがこれこそが、適度な空間を保ち、一〇五度同士で寄りかかり合う心地良さだと気付いた。

この夏帰省した姉と、軽く寄りかかり合って座りながら、いろいろな話をしてもらった。

「いま勉強していることが、将来につながるよ。可能性を切り拓くことができるんだよ。」姉の一言一言が、今まで以上に心に沁みた。

真も、弟に勉強を教えることで、「親のためじゃなく、自分の夢を実現させるために勉強する。それは楽しいことだ。」と気付けた。

九〇度で窮屈に密着しているときに発見できなかった夢は、一〇五度で寄りかかり合う空間の中にこそ在りそうだ。私も、真や梨々のように夢を見つけよう。勉強をして知識を深めた喜びが、さらなる頑張りにつながる。心にイスを置き、心の分度器で測りながら、相手からも寄りかかられる存在になるように、私も成長していこう。

さあ、私の中学校生活も後半戦に入る。

「一〇五度」　佐藤　まどか　著　　あすなろ書房

札幌市学校図書館協議会会長賞

『夜と霧』を読んで私が生きる意味を問う

札幌聖心女子学院高等学校　三年　須藤　あまね

作者、ヴィクトール・E・フランクルは、ユダヤ人精神科医で心理学者である。一九四二年九月にテレージエンシュタット収容所に収容され、ここで二年の時を過ごし、一九四四年十月、アウシュビッツ収容所へ移送。そこで生死を分ける選抜を受ける。彼は「生」の選抜を受けた数日後、ダッハウ収容所へと送られる。一九四五年三月に自ら志願してテュルクハイム病人収容所へ赴き、その約一ヶ月後の四月に解放。この『夜と霧』では、収容者の精神段階や心理状態について、自身の体験に基づき冷静且つ客観的に、彼の約三年間にわたる収容生活を第一段、収容「人生のリセット」。第二段、収容所生活「内面感情の消滅」。第三段、収容所からの解放「夢から醒めた現実への衝撃」の三段階に分けて記されている。

私が初めて「ユダヤ人収容」について知ったのは六歳の時である。入院していた病院の図書館で手に取った『アンネの日記』がきっかけだった。それ以来、様々な絵や本などの作品に触れ、その度に当時の醜悪さを感じて声が出ないほどの衝撃を受け、私の脳裏に焼き付いた。

しかし、この作品はこれまでの作品とは異なり、ページをめくり読み続けていく中でも不思議と時代への憤りや強い悲しみを感じることはなかった。却って私には、フランクルや収容者たちが感じ、考えていたことや心理状態は、酷く、凄惨な状況から見れば当然でむしろこの心理状態になることの方が「正常」であるかのように思えた。そんな淡々と進んでいく文章の中で、私の心に鋭く突き刺さった一文がある。それは、「私たちが生きることから何を期待するか。ではなく、むしろひたすら、生きることが私たちから何を期待しているかが問題なのだ。」という、フランクルが収容所の中で度々自身に問いかけた「生きる意味」についての結論だ。つまり彼は、自身が名前も家族も財産も何もない、ただの「番号」となり、「もう生きる意味がない。」と決めつけ、それを問うことをやめるのではなく、人生の意味は、その時々で変わっていくので、それを一般論で結論付けることができない。だからこそ、自らがそこで何らかの決断をすることで人生の問いに答え、道を切り開いていく。これが生きることであり、私たちは人生に生きる意味を問うのではなく、人生に問われた意味に答え続けることで未来へと繋げることができる。だから自身の現状は、人生からの「問い」であり、これに毎日答え続けなければ「生」を選び続けることはできないと考えたのではないだろうか。

私は、幼少期の入院生活や、母が病気で生死をさまよった四年間、そして昨年の友人の死を経て、なぜ自分はここに存在し、「生」を選んでいるのか、自分が生きる意味は何かということを幾度となく問い続けた。時に、存在理由も、自分が何者なのかもわからず、自暴自棄となり、「死にたい」「消えたい」と思うこともあった。だがその時に導き出した生きる答えは問いに当てはまることはなく、結局今までただ生き延びてきた。しかし、このフランクルの言葉を読んで、私は自分が生きる意味を知り、それを結論付けるにはまだ早すぎることに気づいた。「生」を選択し続け、ひたすらに生きて、生きて、生きた先で初めて私が生きた意味を知ることができると感じ、人生に意味を問うのではなく、問われたことに必死で答え続けようと思う。

彼の体験記を最後まで読み終えた私は、「未来の無限性」を知った。そして、その「怖さ」と「希望」を学んだ。「未来」とは、一人の死で終わるものではなく、必ずその先の先まで無限に続く。この「無限」は、遺されたものの生きる意味を失う原因になることを収容所で死んでいく人々の描写から強く読みとることができた。しかしフランクルは違う。あの凄絶な毎日の中にも幸福へと変わる、運命を左右する選択肢があることを述べ、毎日絶望ではなく本当に小さな喜びや、苦しい収容生活で心を失ってしまった人々との触れあいで極僅かに感じ寄り添ってくれる人間性が明日「生」へと繋がる希望に変わることを作中に何度も記されている。

私は思う。二〇一八年の今日を「平和」に生きていることは偶然で、七〇年前の今日は「混沌」であったと。そして今、この瞬間は「当たり前」ではなく「特別」で、誰ひとり「未来に何が起きるか」を知ることはできないと。

けれども、私たちには未来を「創る」選択肢がある。だから私は、日々問われる選択肢の中から確実に「生」を選び抜き、自分の芯を持って、真剣に、必死に、ひたすらに、今この時を生き抜きたい。

「夜と霧　ドイツ強制収容所の体験記録」

ヴィクトール・E・フランクル　著　　霜山徳爾　訳　　みすず書房

札幌市ＰＴＡ協議会会長賞

たいせつな１００円

札幌市立清田緑小学校　二年　東地　賢頼

「ぼくのじゆうけんきゅうと同じだ。」

ぼくは、この本を見つけた時、そう思いました。ぼくが一年生の夏休みに、おこづかいの１００円でなにが買えるかをしらべて新聞にまとめました。だからぼくがしらべたこととくらべたいなと思いました。

ぼくがしらべたことと同じことは、肉やさんで１００円ぶんの肉を買うことや、八百やさんや魚やさんで１００円で買えるものをさがすことです。ぼくとちがうことは、肉やさんで、牛肉とぶた肉をくらべて、牛肉のほうが高きゅうだとしらべたことです。ぼくは、ぶた肉だと七十九グラム買えるということしかしらべませんでした。

むかし、まだお金がなかったころは、「ぶつぶつこうかん」という、おたがいがほしいなあ、とりかえてもいいなあと思ったらこうかんするしくみでした。でも、そのあと、お金がはつめいされてべんりになりました。今は、その物に１００円はらいたいかどうかを考えて買いものをします。それを、ものの「ねうち」というそうです。

ぼくのおかあさんは、ぼくがじどうはんばいきでジュースを買おうとすると、

「スーパーマーケットで買いなさい。」

と言います。ぼくは、おかあさんはけちだと思いました。でも、ぼくがべんきょうにつかうものや、学校のものは、ねだんにかんけいなく買ってくれます。おかあさんにとってねうちがあるからだと言っていました

１００円でできることをもっとしらべてみると、アフリカでびょうきをよぼうするワクチンが七人分買えます。いのちをまもるきゅう食を五人分も作れるそうです。とてもねうちがあると思いました。

ぼくは今まで、自分のほしいものに１００円をつかってきたけれど、これからは、人のやくに立つことにもつかってみたいです。

「１００円たんけん」　中川　ひろたか　文　　絵　岡本　よしろう
くもん出版

札幌市ＰＴＡ協議会会長賞

私の見つけたベッポとジジ

藤女子中学校　一年　原　杏奈

友情とは何か、友達とは何か。この本を読むまではこんなにも深くそれらにふれて考えたことはなかった。

三年生の春、私は札幌から横浜に転校した。生まれて初めての転校だったが、私はあまり緊迫した状態にはなっていなかった。そんな自分に内心驚いていたほどである。しかし、転校初日、新しい校門、新しい教室、そこにいるたくさんの見慣れない子供達を見たとたん涙がこぼれて止まらなくなった。そんな私にやさしく、明るく出迎えてくれた女の子がいた。ずっと泣いて、顔がぐちゃぐちゃの私に、ななちはやさしく、ずっとそばに居てくれた。ななちとはクラスで一番背が高いが目立たない女の子である。その後、私に友達がたくさんできたのも彼女のおかげかもしれない。

この本は、私に色々なことを教えてくれた。例えば、モモを支える「友達」や時間がどんなに大切なのかなど様々だ。その中で私が最も惹かれたのは、友情についてである。本の中に登場するモモの友達はたくさんいる。その中で一番心強い味方は、ベッポとジジだ。物語も時間もこのゆかいな友達によって進められていく。モモを見ているとモモは自分の道を自分自身で切り拓いているように思えるが、実はベッポとジジというモモにとって不可欠な存在があることで、モモ自身の物語は進むのだ。私はモモと自分をかさね合わせ、ななちは私にとってのベッポだと思いあたった。

ななちと私は次の年でも同じクラスになった。家庭学習のノートの冊数を競争したり、お互い好きな絵を自由帳に描いて、ノート丸々一冊を二人の絵で埋めつくしたりしたこともあった。鉄棒がどちらも苦手で、放課後練習したり、夏休みには、坂の上にある図書館やプールに息をきらしながら行き、勉強したり遊んだりもした。今思えば、短いが濃い時間を共有するうちに、沈黙も辛くない関係を築けた気がする。二年がたった頃には、私とななちは無理に会話をしようとしなくても、一緒にいるだけで安心し合える仲となっていた。

そして私は横浜でもうひとり、ジジのような存在の人に会った。それは、三年生の頃担任だった女性の先生だ。先生は横浜の小学校の先生だが、札幌の教育大学を卒業していて、小学校三年生まで札幌の小学校に通っていたということだった。

同じ日本の小学校とはいえ、札幌と横浜では違うことはたくさんあった。札幌の小学校では、校内ではく靴は自由で「上靴」という。しかし、横浜の小学校では白いバレーシューズのようなものをはき、「上ばき」と呼んで白色で統一されている。他に体操着も白のシャツに紺のズボンと決められている。一つ一つに戸惑う私に、先まわりして教えてくれたのがその先生だった。転校直後、何週間も涙がちに過ごしていた私が、ななちと笑いながら学校生活を送れるようになったのは先生の心づかいのおかげも大きかったと思う。

ところで、モモは私に比べて、友達との関係が深い気がする。それは、友達がフレンドリーであったり優しいからなどということもあるかもしれないが、私はモモには家族がいないからではないかと考えた。家族のいないモモに対し、私には温かい家族がいる。困った時は、いろいろと相談にのってくれる。モモの場合自分の悩みを聞くなどしてくれるのは全て友達なのだ。そんなモモと友達の関係を私は羨ましく思った。だからといって、私がモモのように家族がいなく、モモのように一人で暮らすことになったら、私は耐えられない気がする。泣いてばかりで相手にならないだろう。たとえ百人もの友達がいたとしてもだ。やはり、モモは勇敢だ。

中学生になった今、私は宿題や部活、習い事におわれ、一日があっという間に過ぎていく気がする。朝練のない日は、早起きして学習時間を確保したり、通学時の地下鉄の中で英単語や理科の暗記をしたり、ある意味時間と闘っている。もっと時間があればいいのにとよく思う。

モモは、時間をめぐるし烈な闘いをくり広げ、それは一片の余地も許されない息のつまるものだ。しかしモモはその戦いの間ですら、気のきいた会話をしている。一見無駄と感じるそんな時間が、場を和ませたり、友達を勇気づけたり、たまにはモモ自身を奮い立たせているように思う。

私は高校受験のない学校に通学させてもらっているので、六年間じっくりと学校生活に取り組むことができる。今、ここでの学校生活でジジやベッポを見つけることはできていないが、必ず学校のどこかにいるのだと思う。時間と闘いながら、そして一見無駄に思える時間も楽しみながら、真の友情を探していきたい。その過程が、私自身を成長させてくれると信じている。

「モモ」　ミヒャエル・エンデ　作　大島　かおり　訳
岩波書店

札幌市ＰＴＡ協議会会長賞

『夜と霧』を読んで

札幌聖心女子学院高等学校　三年　竹内　萌乃

私自身アウシュビッツ強制収容所で行われていた人体実験などを調べた経験があり、この本がその強制収容所について詳しく、冷静に書かれていることを知り読んでみた。今まで強制収容所などに入れられた人の体験談が書かれた本を読んだとき、他の小説からは感じたことのないほどの感情が伝わってきたことが多かった。そのため私は、冷静に書かれていると謳われていても筆者の体験談のため多少なりとも感情が入り混じっているものだと思っていた。しかし『夜と霧』を読んでみると筆者は感情を全て消し、あたかも論文を読んでいるのかと錯覚させるほどだった。

筆者は心理学者でありながら強制収容所に入れられ、そこで強制労働者の段階ごとの心理変化や実態を事細かに書き連ねていた。例えば、豆スープ一つにしても知り合いに取り分ける際には下の方からすくいあげ少しでも具を多くする人もいた。しかしながら、この本で後に出てくる取り分け係はまったく顔を見ずに全員に同じ様に配膳したと書かれていた。これができるようになるというのは、生きたいという感情がそうさせたのではないかと私は思う。日々配膳していく中で、配膳係としてどのように行えば自分が生き残れるかと考えた際、どうしても生き残りたいと思ってしまうのは人として当然のことだろう。だが私はこの「生き残りたい」という感情は現代社会にもありうるのではないかと考える。例えば、大学受験やゼロサムゲームなどである。前者でいえば、年間約六十万人もの受験生が一点ましてや〇・五点の差で「生き残り」が決まる。後者ならば、賭けているものはそれぞれ違うにしろ言うまでもないだろう。

然りとて私はこれらよりも、強制収容所と現代を比較した際に最も酷似しているのはいじめなのではないかと考える。いじめの中でもいじめをしている張本人ではなく、いじめをする側に巻き込まれた人がこの感情を抱くのではないだろうか。自分がいじめを受けたくないから、何か行動を起こした事で逆に自分がいじめられるのを恐れ、「生き残りたい」という思いでやむをえずいじめる側に廻ってしまうのではないだろうか。しかし世間ではいじめに巻き込まれるのは自分の意志が弱いからだと語る大人も多い。確かに私も同じ意見を持っていた。しかし自ら願ってもいない、ましてや避けて通りたいいじめという行動に強制的に巻き込まれた彼らの思いが一体どれほどのものなのかは、第三者である私たちには計り知れないだろう。

ではこの「生き残りたい」という感情の根底には一体何があるのだろうか。私は生きる意味や希望であると考える。しかし生きる意味を見つけることは容易ではないのかもしれない。事実私も生きる意味は何かと問われてもすぐに答えを出すことはできない。なぜならこれには人それぞれの答えがあるのではないかと考えるからだ。しかし私はこの人それぞれの答えを知ることが人生において大切なことなのではないかと考える。というのも、この生きる意味という大きな質問をしたときに相手から返ってくる答えには、相手の信念やこれまでの経験が多く含まれていると考えるからだ。それを話してくれる信頼関係を築き、知り、受け入れることでより深い人間関係を築くことができるのではないだろうか。だが中学、高校生のうちからこのような事に気づき発言することは難しいだろう。

一方で、生きる希望というものはこの世の中に溢れているのではないだろうか。心を落ち着けて振り返ってみれば、日々「日常」を過ごしていたら気づくことのできない希望に気づくことができるはずである。その上で私は、この「生き残りたい」という感情は多くの人が持ち合わせている感情であると考える。しかしだからこそいじめというものは減らすことが難しいのではないだろうか。

このような生きる意味や希望自体を持っていなかったら、わざわざ彼らはいじめに巻き込まれてまで生活するだろうか。彼らは生きる意味や希望を持っているからこそ「生き残りたい」一心でいじめ側に廻ってしまうのではないのだろうか。だからと言って私はいじめをしても良いということには決してならないと思う。しかし巻き込まれている人はこのような複雑な思いを抱えている人もいるのだということを念頭に置いてみてはどうだろうか。

最後に私は、いじめに巻き込まれているすべての人にこの本の一節を伝えたい。

「あらゆるものを奪われた人間に残されたたった一つのもの、それは与えられた運命に対して自分の態度を選ぶ自由、自分のあり方を決める自由である。」

「夜と霧　ドイツ強制収容所の体験記録」
ヴィクトール・Ｅ・フランクル　著　霜山徳爾　訳　みすず書房

北海道高等学校ＰＴＡ連合会石狩支部長賞

村田エフェンディ滞土録を読んで考えたこと

札幌聖心女子学院高等学校　三年　大久保　絵未

ひょんなことから日本人を代表してトルコで学べるようになった青年、村田。彼の下宿先はまさに人種のるつぼだった。

屋敷の女主人であり、敬虔なクリスチャンである英国人のディクソン夫人。合理主義的なドイツ人考古学者のオットー。物憂げでミステリアスな雰囲気のギリシャ人青年ディミトリス。ムスリムで、下働きとして働くトルコ人青年ムハンマド。そして、ムハンマドが道で拾ってきた、いいタイミングで絶妙なセリフを叫ぶ鸚鵡。西と東が出会うトルコの地で、宗教、政治的思想、性格などの様々な違いをもつ彼らと村田は時にぶつかり合いながら、それでもお互いに敬意を払いあって親愛を育んでいく。

村田はトルコで暮らしていく中でいくつもの国民性の違いに触れる。例えば、村田が通りで目にするトルコ人達は何もせずにただ珈琲をすすりながら一日を過ごしている。彼らが持ち合わせている「無為」に耐えられる心境は村田の理解の範疇をはるかに超えるものであった。しかし、これに対して村田はこのように述べている。

「国民性に関することには、善悪の判断を下さず、ただ驚きあきれるにとどめておくことにしている。」

グローバル化が進んでいく中、文化の違いに触れるときに、私達はこの村田のような心構えを持つことが重要になるのではないだろうか。自国の文化について「きたない」や「気分が悪くなる」などと否定的なことを言われて嬉しくなる人はいないだろう。しかし、今まで触れたことのなかった文化に対して驚いたり、心の中で不思議に思ったりすることは誰も傷つけない自然で自由なことなのだ。

トルコでの村田の温かく楽しく、時に不思議な時間はあっという間に過ぎる。だが、村田が日本に帰国してから数年後、予想外のことが起こる。友人達の死だ。まず、ディミトリスがサロニカでの騒動に巻き込まれて亡くなる。次第に世界情勢の雲行きは怪しくなり、第一次世界大戦が勃発する。かつて共に暮らした人々の祖国が戦い始めたのだ。そして悲しいことにオットー、ムハンマドの二人は戦死する。二人の死を村田に伝えたディクソン夫人の手紙にはこう書かれている。

「私の母国が、息子のような二人を殺したのかと思うとやりきれません。けれど、弁解の様にきこえるかもしれないけれど、私は二人を殺したのは国ではない、何かもっと国に名を借りた、もっと別のものなのだという気がしてなりません。」

国や民族、宗教、立場や主義主張など様々なことが異なる中で、確かに育むことができた友情。村田にとってそれは国家の関係によらない、村田自身が作り上げた個々とのつながりであり、平和な世界があれば失われなかったはずのものであった。

しかし、それを無視するかのように起こった戦争。ディクソン夫人の言う、国に代わってオットーとムハンマドを殺したものとは何だったのだろうか。きっとそれは戦争の要因とも言えるものだ。

それは、多種多様な「正義の形」だったのではないだろうか。正義は戦争を正当化するために利用されるものである。しかし、正義は平和を実現、持続するために必要なものでもあるのだと私は思う。

平和のために必要な正義。それを物語の中に見つけることができた。

トルコの油が合わずに苦労している日本人がいるという話を村田から聞いたディミトリスが、彼自身はその日本人と会ったことがないのにも関わらず、彼のために醤油を調達してきてくれるのだ。このことに感動して口ごもる村田に対してディミトリスは照れくさそうに微笑んだ後にこのように言う。

「こんな事は何でもないことだ。『私は人間だ。およそ人間に関わることで私に無縁なことは一つもない。』」

これは後に村田の心にも焼き付く言葉である。古代ローマのテレンティウスという人の言葉だという。この言葉をただ知っているだけに留めず、この言葉をもとに国や民族に関係なく困っている人のために手を差し伸べられるディミトリスを私は尊敬する。

戦争がないことだけが平和な世界に求められているのではない。その世界には、思いやりや愛が存在するということも求められている。ディミトリスの起こした行動が平和のために必要な正義だと感じられるならば、私達は彼に倣わなければならないはずだ。

世界には今も暴力、差別などの問題が存在している。

私達一人ひとりがこれらに他人事だと思わずに向き合っていくことがこれからの時代には求められる。そして、多様性の中で暴力や武力ではなく、対話と相手を思いやる気持ちによって最善を見出していけるような平和な世界の実現と持続のために、自分の周りから小さな平和を広めていきたい。

「村田エフェンディ滞土録」　梨木香歩　著　角川書店

光陽社賞

「命」ということ

藤女子中学校　二年　市川　瑞穂

「わたしたちのために、ありがとう。」―これは、動物実験に使われる動物のお世話をする末田輝子さんの言葉だ。私は、この言葉から改めて命というものについて深く考えさせられた。

私は、科学部でカメについての研究をしているが、その時に使用するカメの気持ちや、「幸せ」ということをあまり考えずに、今までカメを扱っていた。

しかし、大学の技術職員として実験動物の飼育を担当している輝子さんはちがった。実験に使われ、つらい思いをしている動物たちに、少しでも「幸せ」を感じてもらえるように、強い愛情をもって接していることが、この本に書かれていた。そして、そんな彼女の仕事ぶりを通して、彼女しか知らない動物たち一匹一匹の個性あふれる姿が登場し、私の中の実験動物の不幸なイメージが和やかなものへと変わった。

確かに、実験動物たちは実験に使われたくて使われたわけではない。つらい思いをたくさんするし、実験に使われた後は、ほとんどの場合、安楽死をさせられてしまう。この事実を知った時、私は心が痛くなってしまった。

ところが、この本に出てくる豚やマウス、ビーグル犬たちの写真は、とても生き生きしていてびっくりした。その理由は輝子さんだ。彼女は動物たちが少しでも幸せな生活ができるように、様々な工夫をしていた。

例えば、動物たちの遊び時間だ。彼女は動物たちのストレスがたまらないように、新しく遊びの時間を作り、用意するおもちゃを毎日変えたりして、動物があきないようにしている。ここからも彼女が動物たちに注ぐ愛の大きさがわかり、感動した。こんな幸せそうな実験動物の姿は初めて見た。

私もこの本を読む前から、商品のできぐあいを人間の代わりに動物で試すという動物実験のことは知っていた。しかし、私にはそれが「人間だと実験できないけど、動物ならできる。」と考えられているように感じてしまい、まるで動物の命を人間より軽いから身代わりにするようで、あまり良くない、できればなくなってしまう方がいいと思っていた。

しかし、この本のなかの実際はちがっていた。輝子さんたちはなにも動物たちを、ただの実験の道具として扱っていたわけではない。一匹一匹の命の重みと向き合って、常に感謝の気持ちを忘れずに、動物たちと接していたのである。

そして、そうした思いは、彼女の上司の研究者にも伝わり、世話だけでなく、実験も動物になるべく苦痛を与えない方法に変わった。例えば、麻酔の量を調節して、動物が死んでしまうことがなく、でも痛みもほとんどないというやり方だ。さらに、動物の体のかわりに保存された臓器を使うなどで、実験動物の数を減らすこともできる。動物実験を完全に無くすことはできないが、こうした工夫により、実験を最小限までおさえられ、少しでも命が無駄に消費されることが減るのだ。これは輝子さんにとっても喜ばしいことだったと思う。

このように、輝子さんや研究者たちは、常に重く、尊い命と向き合っていることが、しみじみと感じられた。この思いは、動物実験をあまり知らない私たちもぜひ知るべきだと感じた。私もカメの研究をしているから、同じ立場だ。この本を読んで、私も彼らのように動物と接することのできる人になりたいと思った。

また、私たちが普段、安心して物を使うことができるのは、裏で動物実験が行われているからだとわかり、改めて動物たちの生きた証を実感できた。この本には、私たち人間に使う手術用メスなど新しい医療機器の動物実験の話があった。多くの人の命を救う手術ができるのは、このおかげだと知った。もしも動物実験が無かったら、身の回りで使う多くの物の安全が保証されることなく、安心して生活できなくなってしまう。そんな危険から、陰で命をかけて守ってくれた動物たちがいたのだ。

「わたしたちのために、ありがとう。」―とても短い言葉だが、この中に動物たちの命に深く感謝する気持ちと、一匹一匹が、いつかは安楽死させられてしまう運命のなか、一生懸命生きていたということを忘れない、という思いが込められているような気がした。

私たちは、日ごろ何気なく病院に行って治療をうけ、薬や化粧品などを使っている。でも、この一つ一つが、本当は一匹一匹の実験動物たちの命の上にあるのだとわかった。こうして文字通り「命がけで」守ってくれた動物たちのことを忘れず、私たちも自分の命を大切にして、感謝しながら、精一杯生きていきたいと思う。

「ありがとう実験動物たち」　太田　京子　著　岩崎書店

キハラ賞

はやくはしれるようになりたい

札幌市立北野台小学校　一年　中川　華

わたしがこのほんをえらんだきっかけは、たんにんのまゆみせんせいが、うんどうかいのまえのひによんでくれたからです。はじめてみたとき、たのしくて、みていてわくわくしたので、もっとよみたいとおもい、おとうさんにかってもらいました。

このほんにとうじょうするヒロシくんのジィちゃんは、やさしくて、しょうがくせいのヒロシくんのことをいつもあかちゃんみたいにいいます。そういうところがわたしのじいちゃんにていて、わたしはすぐにこのジィちゃんのことがすきになりました。

ジィちゃんは、おとしよりだけどあしがとてもはやいです。わたしもジィちゃんみたいにはやくなりたいです。「はやくはしるということは、みぎあしをまえにだしたら、つぎはひだりあしをまえにだす。それを、だれよりもはやくする。」とジィちゃんがいっていて、ほんとうにそれだけで、はやくはしれるようになるのかなとおもいました。わたしも、ヒロシくんといっしょで、あしがはやくないので、らいねんのうんどうかいでは、はやくはしれるように、ジィちゃんのいうとおりにれんしゅうしてみようとおもいます。そして、らいねんのわたしのもくひょうは、かけっこで一いになることと、リレーのせんしゅになることです。もし、リレーのせんしゅになれたら、おとうさんやおかあさん、じいちゃんやばあちゃんに、はやくなったところをみてほしいです。

はしることが、あまりすきじゃなかったけれど、つぎはがんばってみようとおもったので、このほんをよんでよかったです。

「ぼくの　ジィちゃん」　くすのき　しげのり　著　　佼成出版社

教育出版賞

アルジャーノンに花束を

札幌市立宮の丘中学校　三年　大曲　美唯子

　これほどまで、物語における「主人公」という人物に良い意味で感情移入のしにくかった本は、私にとって初めてだった。ミステリーや殺人、はたまた恋愛などのジャンルでは、主人公、またはその他の登場人物に自分を置き換え、共に喜び、悲しみ、何とも言えないような感情にうずもれたり、今、毎日を平和に、当たり前のようでそうでない恵まれた環境で暮らしている私にとって、現実味のないものであったとしても、本の中の人物と感情を共有することができていたのに。「現実味がない。」といった点ではこの本に関しても同じはずなのに、もしかすると、この本の中での出来事は「現実味がなさすぎる。」といったほうが、正しいのかもしれない。あるいは、「経過報告」という形でこの本が書かれているということ、あるいは…。チャーリー・ゴードン。誰もかなわないほどの知能をもっていた頃の彼は、この私のちっぽけともいえるような悩みの原因を何というか。

　三十二歳になっても幼児なみの知能しかないチャーリイ・ゴードン。この本はそんな彼がある手術を受けたことで白ねずみのアルジャーノンを競争相手にしながら天才へと変貌していく姿が、チャーリイの書く「経過報告書」を通して描かれていく物語だ。

　人は、何かを手に入れるとき、同時に何かを失うものだ。それをこの本が私に痛いほどよく教えてくれた。何かを失う、というより、何かを犠牲にしなければいけない、といった方が良いのだろう。彼、チャーリイは天才になったのと引き換えに、まだ幼児なみの知能だった頃にあった、人のもつ心の温かさや素直さ、友達などといったものをなくした。彼が手に入れたものは、とても大きなものではあったのだが、その分犠牲にしたものは一つや二つでは収まりきらず、その代償は大きかった。失ったものを取り戻すことは相当難しいことだと私は思う。でなければ、過去に自分の起こした行動に対して「あの時こうしていれば。」などと後悔したりはしないはずだからだ。もし、失うものが何か物事を進めるにあたってなかったとするならば「責任」というものは生まれないのだろか。そう考えると、人を成長させるには、「利益」と「損失」この二つが必ず必要になってくるのだという考えに私は至った。

　私たち人間は、自分の身の周りで起こる変化に弱い生き物であると思う。この物語でチャーリイに起こったことを例に挙げるとするならば、彼の知能が急激に発達したことによって、彼のことを今まで下に見て、嘲笑ってきた人たちが突然態度を変え、彼を恐怖の存在としてとらえるようになったことだ。確かに、今までと明らかに違った別人のような動き、話し方などをされたら、誰でも戸惑い、接し方に困るだろう。今の、まだ人生経験の浅い私なら、その非情な心をもつ彼らと同じ反応をしてしまう可能性も否定できない。だが、そんなとき、自分が肌で感じたことや抱いた感情だけではなく、きちんと相手や第三者の立場から、その場の状況を客観視して冷静に分析し、理解、行動できるような一人の人間になりたいと感じた。

　常に、どこか自分の心の中にスペースを作っておけるような心の広さが欲しい。そうしておくことができたならば、いかなることがあっても、必要以上に考え込んだりせず、ストレスを軽減することができるのだから。それが、今の課題なのかもしれない。この本にはそういった、何か本と私と通ずるものが散りばめられていた。

　こうして、この本に対する私の思いというものは、今、この瞬間にも変わっていく。冷静な分析というものは難しい。天才的な知能をもつ彼の書く「経過報告書」を見るとよく分かる。やはり、彼はすごい。

　「経過報告書」を通じて彼の生き様や感情や一人の人間としての変化などを見ていくのはとても新鮮であり、また、文で説明を受けて変化を感じ取るだけでなく、目でも実際に彼に関わっているような感覚に陥り、より多くの発見をすることができるものだった。クライマックスに描かれている、彼とアルジャーノンの関係性には、涙がとめどなく流れた。最後の一文には作者の伝えたいことすべてが詰まっているような気がして、何回も何回も繰り返し読んだ。

　まだ、私がこれから歩んでいく道の先には、どれほど多くの苦悩が待ち受けているのかは分からないが、彼は、私に先の見えない未来への勇気を与えてくれた。まずは、身近な目に見えている小さなことから片付けていこう。どんな小さなことだって良い。誰に何を言われたって良いのだ。彼のように力強く。自分の過ごしている日々をありがたく思い、今ある時間を大切にしたいと思う。

「アルジャーノンに花束を」　ダニエル・キイス　作　小尾　芙佐　訳
ハヤカワ文庫

北海教育評論社賞

『一〇五度』と私

札幌市立向陵中学校　一年　須田　羽奈

「人間なんてのはな、だれだってだれかに寄りかかって生きてんだよ。一人で直立してるやつなんて、いやしねえ。」

この言葉が心に響いた。たがいに妥協せず、ぶつかり合い、同じ目的に向かって突き進んでいく、持ちつ持たれつな関係。たがいに一〇五度くらい寄りかかり合う関係。そんな関係を保っている、主人公真と、梨々は最高のパートナーだ。

人の気配を感じるからイスが好き。プロダクトデザイナーを目指す真と、デザイナーの設計図面を形にするモデラーを目指す梨々は、チームを組んで『全国学生チェアデザインコンペ』に挑むことになった。しかし、真の何気ない一言で梨々とけんかをしてしまう。コンペに向けて動き出した矢先のけんか。私にも似た経験がある。　それは、私が小学六年生のときのこと。私は、学校で夏休みに開催される大縄跳び大会に出場することになった。メンバーは五年生で出場したときとほぼ同じ。

「去年は銀メダルだったから、今年は金メダルを目指そう。」

そう言って、朝も中休みも昼休みも練習した。みんなで私の家に集まり、ミサンガもつくった。次の日は日曜日だったが、学校で練習をするつもりだった。しかし、私を含む三人が学校に着いたとき、残りの三人はいなかった。そのまま二時間程してもこない。

「忘れてるのかな。」

「そうだね。帰ろっか。」

この一言が後から問題になるなんて、思ってもみなかった。

次の日、

「ちょっときて。」

と昼休みに呼ばれた私。

「なんで昨日、勝手に帰ったの。」

彼女によると、一緒に来る予定だった友達が自転車のかぎをなくし、探していたのだという。当然、私はそんなことがあったとは知らなかったので、謝った。しかし、三人の怒りはおさまらず、

「もうこのチームやめて。」

と言われた。私自身が悪かったと反省していたので、チームを離脱した。私が抜けたチームは、見事金メダルを獲得した。

私はすぐに仲直りできなかったが、真は祖父に説教され、謝りにいく。そのときに祖父に言われた言葉が、

「おまえは今、あの子にちょっとどころかかなり寄りかかってんだよ。なのに、直立して一人で立ってるような顔してやがる。」

色々な人に支えられているのに、一人で立っているような顔をしている。この点では、真と私は似ている。私がこれを読んだ瞬間、「明日は我が身」という言葉が頭に浮かんだ。大縄跳び大会でのけんかも、私がチームのみんなに支えられていることを忘れ、一人ではやとちりしてしまったがためにおきたことだ。自分が様々な人に支えられて生きていることを忘れないようにしたい。

一方で、真と私の似ていない点は沢山ある。その中でも特に、真を尊敬できると思った点は二つだ。

一つ目は、夢が決まっていること。真の夢は理由がはっきりしており、それに向かって努力している。私はどうだろう。夢は決まっているが、理由はしっかりとしていない。中学三年生の真は二歳年上だからということもあるかもしれないが、それでも素晴らしいと思う。

二つ目は、自分の夢を諦めないこと。真の父は、真のプロダクトデザイナーという夢に大反対している。父には父なりの理由があるが、二人はこの物語の中で何度も意見が衝突する。しまいには、

「どうしてもわたしの忠告が聞けないのなら、将来は飢え死にする覚悟でやれ。茨の道を自分で選ぶ以上、泣き言を言うな。途中で放り投げても、助けてやるつもりはないぞ！」

とまで言われてしまう。もし私だったら、自分の将来に迷ってしまうだろう。しかし真は、自分が来るべきして来た道を突き進もうと決意する。その真の勇気と覚悟に心を打たれた。

私は『一〇五度』読んで、父に反対され、その仕事についた人がどれだけ苦労するかを知っても、自分の夢を追いかける真は、勇気があると感じた。イスは、木材を売った人、加工した人、丸太を運んだ人、木を切り倒した人、その木を植えた人など多くの人の仕事が次々にバトンタッチされてできている。自分の身の回りのもの全てに社会の繋がりが凝縮されている。そう考えると、世界のまた違った一面が見えてくるのではないか。私は、この本を読んだことで、諦めないことの大切さや、人との関わり方を、あらためて学んだ。今後は、この本で学んだことを生かし、自分の夢や目標を決して諦めず、自分を支えてくれている人への感謝を忘れないようにしたい。

「一〇五度」　佐藤　まどか　著　　あすなろ書房

図書館ネットワークサービス賞

家族の笑顔

札幌市立美香保小学校　三年　木村　藍吏

「同じ子どもでも、世界にはいろいろな子どもがいるんだな。」というのが私が一番はじめに感じたことです。

私は、はたらいた事はないけど学校も行かないでいっしょうけんめいはたらいている子どもたちがいると思うと、えらいな、とか雪がふったら学校が休みでかわいそうだな、とか思いました。もし自分が毎日、毎日学校も行かないで、はたらかなければいけなかったら、それはとてもつらい事だと思います。お金のためにつらい思いをしながらはたらいたり、毎日弟のめんどうを見たり、なきながらはたらく事を私ができるかを考えると、やっぱりとてもできない事だと思いました。そしてはたらかなくても、学校やお友だちと楽しく遊んだりできる事は、しあわせだなと思いました。

でも、そういう事ができるっていう意味は私の母やおばあちゃんがいるからです。私の母は病院でかんごしとして私と弟のために夜ねないではたらいています。帰ってくると、とてもうれしいです。でも帰ってくるととてもつかれていてかわいそうです。夜、少しさみしいけど、でもおばあちゃんが来てくれてごはんをつくったり、ないてしまった時はいっしょにねてくれる時もあります。いつも夜さびしくてかなしいけどおばあちゃん、おじいちゃん、弟がいて少し勇気をもてます。そしていつも勇気をあたえてくれる家族にかんしゃしています。

わたしの「はたらく」は家族になにかをしてとお願いされてお手伝いをする事です。家とかで母に「おつかい行ってきて。」とか「弟を見ていてね。」とか「くく（犬）のごはん六時にあげてね。」とか言われたらいつもひとつずつやっています。もっと大変なお手伝いもあります。たとえば、「そうじきをかけるから下においている物をつくえの上にあげて。」というお手伝いを毎日じゃないけどしています。私はいろいろたのまれて「いやだな。」と思う時もあるけれど、母やおばあちゃん、弟、おじいちゃん、自分のためにもお手伝いをします。家族がしあわせになるためには、世界の子どもたちのように笑顔ではたらきたいです。自分にはなかなかできないけれど、でもそれは本当にすてきだと思いました。

この本を読んで、はたらく事はつらい事も、かなしい事もあると思うけど、子どもたちは家族をしあわせにするためにはたらいていると思いました。

私の「はたらく」はしっかり学校へ行く事と、家で弟とくく（犬）のめんどうを見る事です。そして家族のみんなが、笑顔になれるって事です。

はたらいている世界の子どもたちは、みんな笑顔です。

私も、大人になったら、はたらいて私の母やおばあちゃん、弟、おじいちゃん家族のために大人になったらみんなをはやくらくさせてあげたいと思いました。

「はたらく」　長倉　洋海　著　アリス館

図書館ネットワークサービス賞

平和を願って　～僕が語り継ぐべきこと

北海高等学校　二年　　小西　海翔

吹き抜ける爽やかな風と潮騒。一面に広がる白い砂浜とコバルトブルーの海。僕の思い描く『沖縄』の景色である。しかし、この本を数ページめくっただけでその美しい景色はモノクロの景色へと変わっていった。それはまるで荒唐無稽な作り話なのではないかという錯覚に陥るほどの凄惨な戦場で、僕は何度も目を背けそうになった。

これまでにいろいろな小説や映画でおぞましいシーンを見たことはあったがそれらはすべてフィクションだからこその興味深さがあった。だがこの本はノンフィクションであり、全てが現実に起こった出来事なのである。

正直僕は今まで、沖縄での戦争について無知だった。なぜならそれは戦争と言えば広島、長崎に投下された原子爆弾の想像を絶する被害と恐怖という印象が強く、戦争について読んだ本と言えば広島に関するものが多かったからだ。しかし今回この本に出会い僕の戦争に対する意識はこれまで以上に深いものに変わっていった。

本の中にはたくさんの犠牲者の話が語られているが、その中でも特に僕の心に深く突き刺さったのは、奇蹟的に生き残ったひめゆり学徒隊の方たちが二度と戦争をしてはいけないという思いで書き残した戦場での体験記である。ひめゆり学徒隊とは、沖縄戦の負傷者を治療する野戦病院に送り込まれた、僕と同じ十六、十七歳の五百名にものぼる少女たちのことだ。その少女たちが従軍看護婦として働いていたのは、設備が整った病院と呼べるような所ではなく、野外や真っ暗な壕の劣悪な環境下の元だったそうだ。劣悪なのは環境だけではない。薬や包帯も十分にない中、血や膿だらけの患者を看護したり、シラミやウジがわき、骨と皮だけになった患者や精神に異常をきたし奇行を繰り返す患者などを目の当たりにしなければならなかったそうだ。しかし死と隣り合わせだったのは患者ばかりではない。看護していた彼女たちもまた毎日死の恐怖にさらされていた。彼女たちの中には看護中にアメリカ兵のガス弾で殺されたり、捕虜になるのを嫌がり自決したり、餓死してしまった人たちもいたそうだ。なぜまだ若い彼女たちがこのような恐怖や死と隣り合わせの毎日を送らなければならなかったのだろうか？　僕は激しい憤りと深い悲しみを覚え一旦本から目を背けた。それと同時に僕の曾祖父が生前語ってくれた戦争の記憶について思い出していた。

僕の曾祖父は函館ドックで船の部品を作る仕事をしている最中に爆撃にあった。「じいちゃんは間一髪助かったが隣にいた同僚は倒れてきたクレーンの下敷きになり亡くなってしまってな。下敷きになり痛み叫び血だらけになっていた同僚に、じいちゃんはどうすることもできず断腸の思いだったんだ。さっきまで一緒に働いていた大切な同僚を一瞬のうちに亡くすなんて、戦争をひどく憎んでいるし、自分だけ助かって申し訳ない気持ちになったんだ。戦争は何があろうとしてはいけないんだよ…。」と。その頃の僕はまだ幼くて深くは理解できなかった曾祖父の言葉を今ならしっかりとこの胸に刻みつけることができる。曾祖父がいない今、僕がその思いを引き継ぎ伝えていかなければならない！　と再び本を読み進めることにした。

戦争は人間の心を簡単に醜いものに変えてしまう。『学童疎開船対馬丸の悲劇』では、アメリカ軍の襲撃に備えて老人や子どもそして女性たちが郷里から離れて少しでも安全に生活するため、対馬丸に乗り込み日本本土や台湾を目指した。しかし悲劇は起こってしまう。夜十時過ぎ、悪石島近海で、アメリカの潜水艦から攻撃を受け三発の魚雷が命中し、暗黒の海上で地獄と化してしまった。そんな沈みかけた対馬丸の船体上で、ある少女は流れてきた醤油樽に取りすがり、なんとか命をつないだ。そしてやっとの思いで一艘のイカダを見つける。だがそのイカダをめぐり何十人もの人々が奪い合い蹴落としあっていたそうだ。何という光景だろうか。またある壕の中では、赤ちゃんの泣き声がもれてはアメリカ兵に見つかってしまう、と味方である日本兵が赤ちゃんを取り上げ殺してしまうという酷いこともあったようだ。もはや誰を信じ生きていってよいかわからなくなるであろう。自分より弱いものを優先して助けるという気持ちはどこかへ消え、我先にと自分の命を優先させてしまう人間の儚さに未だかつてない嫌悪感を覚えた。しかしそれが戦争なのである。

日米戦争で日本歴史史上、国内で初めて戦場となった沖縄。明るい未来を担う子どもたちをも巻き込み、罪のない人たちまで犠牲にし、味方まで手にかけなければならない戦争。

僕はこの本で改めて知り得た戦争についての真実を受け止め、犠牲になった方たちや曾祖父の分まで伝え続けたいと思う。もう痛みや苦しみから目を背けない。未来永劫、平和な毎日が続くことを心から強く願って……。

「戦争と沖縄」　池宮城　秀意　著　　岩波書店

光村図書出版賞

やり遂げることの大切さ

札幌市立宮の森小学校　六年　松田　莉奈

私が最初にパンの缶詰に出会ったのは、今から三年前に父と一緒に青少年科学館に行った時だ。青少年科学館では、宇宙食の展示があり、色々試食できた。スタンプラリーをした後に一つプレゼントをもらえたので、私は迷うことなくパンの缶詰を選んだ。試食をした中で一番おいしかったからだ。この本を読んでみようと思ったのは、宇宙食の味を覚えていたからだろう。私の出会いは宇宙食だったが、パンの缶詰が生まれたきっかけは、震災だったことをこの本で知った。今年も西日本豪雨で死者二百人以上、何千人もの避難生活者がいると二ュースで伝えられている。パンの缶詰は一時であるが、避難生活者のお腹と心を満たしていると思う。

この本は、パン・アキモトで二代目として働く秋元さんがパンの缶詰を作って、ソーシャルビジネスを行う話である。秋元さんが行っている「救缶プロジェクト世界に優しさを届ける」は、企業や学校や自治体などに備蓄食としているパンの缶詰を賞味期限一年前に回収して、困っている人に届ける支援だ。ビジネスをしながら社会貢献するソーシャルビジネスとして、利益を得ながら、支援を継続している。すごいアイディアだと思った。

私の家でも、ソーシャルビジネスに協力していることがあった。それは、毎月購入している共働学舎の豚肉だ。共働学舎とは、競争社会ではなく、協力社会として、独立生活を目指している団体だ。健常者とハンディキャップを持った人たちが、共に働き生活している。ここの豚肉は、とても美味しく、私も毎月楽しみにしているが、どうして共働学舎の豚肉を注文しているのか、母に聞いてみた。「共働学舎でスタッフとして働くことはできないが、お肉を買うことで協力できるのよ。」と母が言った。パンの缶詰も同じである。どちらも商品購入することによって、社会貢献が同時にできるのだ。一方、秋元さんは、社会貢献だからといって手を抜いた仕事はしていない。パンの缶詰は、今も改良が続いている。消費者がまた買いたいと思える品を作るため、日々努力している。

この本との出会いは、私に大切なことを気づかせてくれた。それは、秋元さんのように、困っても諦めず、とことん考えて工夫することや、人とのつながりを大切にすることだ。しかし、私には諦めてしまう所があるのと、人の助言を聞かないことがある。七月の珠算検定試験の二週間前、体調を崩し学校を休んだ。もちろん、珠算の練習はしなかった。治っても、今回はどうせだめだと諦めて、練習しなかった。父に「毎日の積み重ねだから練習したら。」と言われても聞かなかった。「継続は力なり。」今は、諦めないで継続することの大切さに気づくことができた。そして、出会いやきっかけを大切にしよう。人からの助言には耳を傾けよう。いろいろなことに挑戦しよう。大人になって、社会貢献できるよう、成長していきたい。

「世界を救うパンの缶詰」　菅　聖子・著　（株）ほるぷ出版

優　良　賞

◇小学校の部　低学年

自　由	「ミツバチのふしぎ」をよんで	札幌市立新琴似南小学校	2年	上野　晴南
課　題	友だちはとくべつなそんざい	札幌市立厚別北小学校	2年	鈴木　爽太
指　定	シマフクロウのぽこを読んで	札幌市立日新小学校	2年	齋藤　楓子

◇小学校の部　中学年

自　由	ふしぎな動物はたから物	札幌市立厚別西小学校	3年	坂本　温音
課　題	「すごいね！みんなの通学路」を読んで	札幌市立福住小学校	3年	長内　航平
指　定	はたらくとはどういうこと？	札幌市立白楊小学校	4年	杉岡　璃音

◇小学校の部　高学年

指　定	ひたむきな姿があたえるもの	札幌市立桑園小学校	5年	岡　七海
自　由	自分らしく！！	札幌市立大谷地小学校	6年	原田　葵
課　題	失敗を恐れない勇気	札幌市立日新小学校	6年	進藤　真央

◇中学校の部

自　由	嫌ってばかりじゃつまんない	札幌市立陵北中学校	1年	根井　那々佳
自　由	『心からのありがとう』	藤女子中学校	1年	高輪　柚希
自　由	七歳の少女が世界に伝えたこと	札幌聖心女子学院中学校	1年	西　恵里奈
課　題	「一〇五度」を読んで	札幌市立向陵中学校	1年	鎌田　暖士
自　由	くちびるに歌を持って	札幌市立向陵中学校	2年	渡邉　光麗
課　題	大切にしたい「一〇五度」の関係	札幌市立向陵中学校	2年	大﨑　逢
自　由	「生きる」ということ	札幌市立宮の丘中学校	2年	伊達　輝
自　由	幸せな悲劇	札幌市立向陵中学校	3年	小室　冴羽
自　由	「告白」	札幌市立向陵中学校	3年	阿部　瑞樹
自　由	「青い鳥」を読んで	札幌市立宮の丘中学校	3年	石井　寛人

◇高等学校の部

自　由	理想を歩く	札幌光星高等学校	1年	関　大智
自　由	アカガミ　ー命と時代のあり方-	市立札幌啓北商業高等学校	1年	佐藤　未来翔
自　由	小さき怒号	札幌光星高等学校	2年	菅　浩輔
自　由	愛する人には	札幌光星高等学校	2年	加藤　ひより
自　由	『罪と罰』を読んで	札幌聖心女子学院高等学校	3年	中村　理峰

佳　作

◇小学校の部　低学年

自　由	・「ルラルさんのバイオリン」をよんで	札幌市立新光小学校	1年	佐藤	美和
課　題	・がっこうはすてきなたてもの	札幌市立伏古小学校	1年	小関	夏果
課　題	・せかいをひろげたがっこうくんのゆう気	札幌市立山の手小学校	1年	志貴	美遥
課　題	・学校だってキラキラしている	札幌市立大谷地小学校	1年	豊沢	峰々
課　題	・「がっこうだってどきどきしてる」をよんで	札幌市立北九条小学校	1年	三島	縁
課　題	・「がっこうだってどきどきしている」をよんで	札幌市立栄西小学校	2年	佐川	柚來
課　題	・「きみ、なにがすき？」を読んで	札幌市立桑園小学校	2年	上西	ゆりあ

◇小学校の部　中学年

自　由	・ホープがのこしてくれたこと	札幌市立福住小学校	3年	岩本	亜澄
自　由	・「ファーブル昆虫記」を読んで	札幌市立福住小学校	3年	忍山	馨音
自　由	・みんなメロメロにしちゃう赤ちゃんのふしぎ	札幌市立澄川西小学校	3年	井手野	采加
自　由	・森のおくからを読んで	札幌市立栄北小学校	3年	佐川	くるみ
課　題	・『すごいね！みんなの通学路』を読んで	札幌市立もみじの森小学校	3年	竹田	雅
課　題	・「人間と動物をへだてているもの	札幌市立北九条小学校	3年	三島	和
指　定	・すきなものを食べたい	札幌市立北白石小学校	3年	堤十	和
自　由	・世界の人の学校の行き方	札幌市立栄北小学校	4年	横山	英伶
課　題	・いいことがある日にするために	札幌市立白楊小学校	4年	鶴澤	美波
指　定	・さらわれたチンパンジーを読んで	札幌市立中央小学校	4年	常松	美希
指　定	・『キワさんのたまご』ゲットだぜ！	札幌市立白楊小学校	4年	森怜	衣奈

◇小学校の部　高学年

自　由	・マララから学んだ世界の平和	札幌市立桑園小学校	5年	梅澤	里寧
課　題	・「クニマスは生きていた！」を読んで	札幌市立新琴似小学校	5年	小原	大河
課　題	・「奮闘するたすく」を読んで	札幌市立日新小学校	5年	小柳	志嬉
課　題	・クニマスは生きていたを読んで	札幌市立白楊小学校	5年	杉原	遥陽
課　題	・私もこうだった	札幌市立北白石小学校	5年	堤和	香
指　定	・「世界を救うパンの缶詰」を読んで	札幌市立北陽小学校	5年	鎌田	香桜
指　定	・「焼きたてのパンと優しさが詰まったパンの缶詰」	札幌市立共栄小学校	5年	君羅	妃保
指　定	・「あした飛ぶ」を読んで	札幌市立桑園小学校	5年	宮﨑	ほのか
自　由	・ひた向きに生きる	札幌市立白楊小学校	6年	佐藤	悠香
自　由	・感化する力	札幌市立日新小学校	6年	堀山	珠寧
自　由	・ピーコの祈り	札幌市立北野台小学校	6年	山田	悠乃
課　題	・理解することの大切さ難しさ	札幌市立白楊小学校	6年	尾田	舞世
指　定	・背中を押してくれた本	札幌市立桑園小学校	6年	中野	沙羅

◇中学校の部

自　由	・恵美が教えてくれた「友だち」の存在	藤女子中学校	1年	吉田	優衣
自　由	・「山椒魚」を読んで	札幌市立新川西中学校	1年	猿田	晟那
自　由	・「高瀬舟」を読んで	札幌市立向陵中学校	1年	井田	彩那
自　由	・西の魔女からのメッセージ	札幌市立陵北中学校	1年	武田	萌瑚
自　由	・「サラバ！」という希望	札幌市立向陵中学校	2年	雨宮	優芽
自　由	・自分の世界地図の下書きを描くために	藤女子中学校	2年	宮木	麻帆
課　題	・『一〇五度』を読んで	札幌市立西陵中学校	2年	安住	佳穂
自　由	・希望を捨てず、今を生きる。	札幌市立向陵中学校	2年	道井	シエル
自　由	・「神様のカルテ」を読んで	札幌市立新川中学校	3年	中谷	唯花
自　由	・強く生きる	札幌市立向陵中学校	3年	椋平	千暖
自　由	・それぞれの執念	札幌市立向陵中学校	3年	西脇	世莉
自　由	・十字架を読んで	藤女子中学校	3年	西	桃花

◇高等学校の部

自　由	・生き方	市立札幌旭丘高等学校	1年	玉利	佳奈子
自　由	・生きるということ	市立札幌旭丘高等学校	1年	藤井	若那
自　由	・「運命」	市立札幌旭丘高等学校	1年	二村	那奈
自　由	・１つのキッカケ	北海道札幌啓成高等学校	1年	伊藤	優花
自　由	・「きみの友だち」を読んで	北海道札幌啓成高等学校	1年	松尾	有華
自　由	・生き抜くことの大切さ	札幌聖心女子学院高等学校	1年	上山	舞唯
課　題	・命の輝きを知って～向き合うことの大切さ	北海高等学校	2年	小西	海翔